

京都秋期特別集会 第1回（於大和屋旅館）

神の選び

――イザヤ書第19、40、42、43、44章――

1977年11月26日

小池辰雄

旧約の福音 聖書の体現活現者 聖霊のバプテスマ 汝はわが有なり 神は原因なり目的なり

【イザヤ19】

24 その日イスラエルはエジプトとアツスリヤとを共にし三つあいならび地のうえにて福祉さいわいをうくる者となるべし。25 万軍のエホバこれを祝して言いたまわくわが民なるエジプトわが手の工わざなるアツスリヤわが産業なるイスラエルは福さいわいなるかな。

【イザヤ40】

1 なんじらの神いいたまわく、なぐさめよ汝等わが民をなぐさめよ。2 懇ねんごろにエルサレムに語り之によばわり告げよ。その服役の期すでに終り、その咎とがすでに赦ゆるされたり。そのもろもろの罪によりてエホバの手よりうけしころは倍したりと。

【イザヤ42】

1 わが扶たすくるわが僕わが心よろこぶわが撰人えらびひとをみよ。我わが霊みたまをかれにあたえたり。かれ異邦人ことくにびとに道をしめすべし。2 かれは叫ぶことなく声をあぐることなくその声を街頭ちまたにきこえしめず、3 また傷める蘆あしをおることなくほのくらき燈火ともしびをけすことなく真理まことをもて道をしめさん。4 かれは衰えず喪膽きおちせずして道を地にたておわらん。もろもろの島はその法言おしえをまちのぞむべし。5 天をつくりてこれをのべ地とそのうえの産物なりいでものとをひらきそのうえの民に息をあたえその中をあゆむものに霊みたまをあたえたもう。神エホバかく言い給う。……8 然どわが僕イスラエルよわが選めるヤコブわが友アブラハムの裔すえよ。9 われ地のはてより汝をたずさえきたり地のはしよりなんじを召しかくて汝にいえり汝はわが僕われ汝をえらみて棄てざりきと。

【イザヤ43】

1 ヤコブよなんじを創造せるエホバいま如此かくいい給う。イスラエルよ汝をつくれるもの今かく言い給う。おそるるなかれ我なんじを贖あがなえり。我なんじの名をよべり汝はわが有ものなり。……4 われ見てなんじを宝とし尊きものとし



て亦なんじを愛す。この故にわれ人をもてなんじにかえ民をなんじの命にかえん。

【イザヤ44】

「されどわが僕ヤコブよわがえら撰みたるイスラエルよ今きけ¹なんじを創造しなんじを胎内はらのうちにつくり又なんじを助くるエホバ如此かくいたもうわがしもベヤコブよわが撰みたるエシュルンよおそるるなかれ²われ渴けるものに水をそそぎ乾ひたる地に流れをそそぎわがみたま霊をなんじの子輩こらにそそぎわが恩恵めぐみをなんじの裔すえにあたうべければなり……⁶エホバ、イスラエルの王イスラエルをあがなうもの万軍のエホバ如此いたもうわれは始はじめなりわれは終おわりなりわれの外ほかに神あることなし

●旧約の福音

イザヤ書は66章から成り立っている。聖書全巻66書の縮図とも言いたい素晴らしい預言書です。1～39章、40～55章、56～66章の三つに大きく区分できる。

そのうち1～39章が第一イザヤと言われ、預言者イザヤの書です。紀前740年頃から701年頃の40年間、ユダのウジア王の歿した時からアッシリヤの王センナケリブがエルサレムを攻撃した時までの預言者です。センナケリブはイザヤの信仰の力に負けて退いた。そういつた偉大な信仰を以て貫いた預言者です。第一イザヤは正に信の預言者です。神を

「イスラエルの聖者」

と言っている。

次に第二イザヤについて申すならば、北イスラエルは紀前721年にアッシリヤに亡ぼされてしまう。南ユダが亡びたのは紀前586年。その時の預言者はエレミヤです。エルサレムの主な人たちがバビロニアに捕囚された。これがバビロニア捕囚。それが半世紀にわたる。その時の信仰の指導者としては預言者エゼキエルというのがいる。バビロニアがアッシリヤを亡ぼし、バビロニアはペルシャに亡ぼされる。ペルシャの王キュロスがペルシャ王国を立て、紀前538年頃、バビロニアに捕囚されたエルサレムの人々をエルサレムへ帰還させる。その頃に現われた預言者が、

「偉大なる知られざる者」

といわれる第二イザヤである。多分、イザヤかエレミヤの弟子であつたろうと思われる。第一イザヤの34、35章は第二イザヤの筆ではなからうかと考えられます。第二イザヤがイザヤ書の中で一番中心になる所で、旧約聖書に於ても最深最高の所です。深淵の如く深く、また高峯の如く高い。これは正に旧約の福音です。全部これは詩文です。預言者の文体は大方、詩文なんです。大風の如く怒濤のごとく響いてくる。バッハ、ベートーベンの音楽だね。論理じゃない。神の言は音楽的です。しかもそれはドラマティック(劇的)なものです。



第三イザヤというのはどういふのかというと、エズラ、ネヘミヤという預言者的な祭司がいました。エルサレムの神殿がこわされたので、帰って来て神殿を再建することになった。その神殿を建て直す預言者的祭司として働いたのがネヘミヤという祭司。第二神殿が建つたのは紀前515年。ところで、エズラというのは祭司的な宗教改革をやりました。エズラの宗教改革は紀前444年。その515年から444年の間が、第三イザヤの歴史的な背景になっている。神殿宗教だけでも、まだ硬化現象を起こしていない。そこには預言者的な精神が生きていました。筆者は多分、第二イザヤの弟子、だからイザヤの孫弟子といっているような人が書いたわけですね。

全イザヤ書は旧約の福音です。非常に壮大雄偉なる文章であります。聖書が語っている神の言はどのようなことになっても亡びない。

「⁸草はかれ花はしぼむ。然どわれらの神のことは永遠にたたん。」(イザヤ40・8)

そのことはイザヤ書の40章に書いてある。

「¹なんじらの神いいたまわく、なぐさめよ汝等わが民をなぐさめよ。²懇ろにエルサレムに語り之によばわり告げよ。その服役の期すでに終り、その咎すでに赦されたり。そのもろもろの罪によりてエホバの手よりうけしところ

は倍したりと。」(イザヤ40・1・2)

イスラエルの歴史で出バビロニアと共に忘れてはならないのは出エジプト。モーセがエジプトに捕らわれの身になっていたイスラエルの民を半奴隷状態から解放した。これは出エジプトであり、その発端は出エジプト記第3章。出エジプトは患難からの解放。出バビロニアは罪からの解放。不信の罪に対して捕囚という神罰を受けた。罪と罰。これは法則。イスラエルの民は神罰に50年服して、エホバの神に許されたわけであります。

エホバがイスラエルの民を選んだのは、彼らが大きな民であつたからではない。むしろ小さい民であつたから。また、善良だつたからではない。頑なな民であつたからである。

「神は小さな頑なな仕様が^{かた}ない民を選んだ」

と申命記に書いてある(申命記7・7、9・6)。そういうイスラエル民族がエホバの神さまに選ばれた。

「私はお前の神で、お前は私の民だ」

その約束、選びの実蹟は、モーセに与えられた「十言」によってイスラエルの民はあらわす責任を負わされました。出エジプト記20章と申命記5章。第一言、

「汝わが顔の前にいかなる神をも神とすべからず」

本当は原文は、

「汝にとつてはわが面前には他の神々はないぞ」

という言です。神々はいるんだ、他に。だけれども、



「私の顔の前では、私だけがお前にとつては神だ」

という一対一の人格関係。イスラエルの宗教は拝一神が本質であります。そのようにして、一対一の人格関係で掴みかかられたのがイスラエルの民なんです。だから、

「汝はわが民、われは汝の神」

というのは、正に最初の選びの言なんです。

●聖書の体現活現者

イザヤ書42章1～4節、

「わが扶くるわが僕わが心よろこぶわが撰人をみよ。我わが霊をかれにあたえたり。かれ異邦人に道をしめすべし。²かれは叫ぶことなく声をあぐることなくその声を街頭にきこえしめず、³また傷める蘆をおることなくほのくらし燈火をけすことなく真理をもて道をしめさん。⁴かれは衰えず喪膽せずして道を地にたておわらん。もろもろの島はその法言をまちのぞむべし。」

(イザヤ42・1～4)

これは「エホバの僕」(エーベット・ヤーヴェー)の歌の第一歌です。預言者は神さまが直接語りかけている言を伝えている。これが預言者の言の素晴らしいところなんです。神の言を伝えている。ですから主体は神。預言者は聴き手、伝達者。話しているのは神さま。

「わが扶くるわが僕」

と神さまが「わが」と言っている。神さまの一人称が主体になっている。

「私だよ、私だよ。私が言っているんだよ、私が選んだんだよ」

と言っている。「僕」というのは主人の言うことを「はい、はい」と言つて、聴いて実行する者。師弟、親子、夫婦の関係には、僕的なものが言葉の正しい意味においてあるはずですよ。それがいわゆる民主主義で大分くずれてしまった。この頃の民主主義というのは大部分身勝手主義です。

「わが心よろこぶわが撰人をみよ。」

「我汝を悦ぶ」という言が、洗礼を受けたイエスの上に天から響いてきたね。

「汝はわが愛しむ子なり、我汝を悦ぶ」

と。それはどういう心境の人に臨んでくるのでしょうか。「僕」の姿の人に。

「神さま、あなたの御意が成るように！あなたの御意をきかせて下さい。私はそれをやりますから、私の心ではありません」

という心境に。これが僕の心。神一切、神全托の態度。自分を開けわたして無者となつていく心。キリストは正にこの僕の自覚をもつて祈つておられた。キリストの祈りの中心は正に僕の自覚です。だから、イザヤ書の「エホバの僕」をイエスは自分の預言の相として受けとめたのです。イザヤ書は正に



「旧約の福音」「隠れたる福音」「福音の土台」

といってよい。イエスの一番愛読したのはイザヤ書です。そして特にイザヤ書を身証なされた。イザヤ書の神の言を体現してしまった。分るの分らないのという次元ではない。

皆さんは聖書の活現者と成らなくては。体現、活現する。でなければ、聖書を読んだとは言えない。聖書はそれだけの対決を要求している。解るの解らないの、意味がどうのこうのということではない。

「我わが霊をかれにあたえたり。」

極めて重い言がたたみかけてやってくる。旧約的な聖霊が、神さまの霊が与えられた。

「かれ異邦人に道をしめすべし。」

「道」という語は原文では、いわゆる「デテック」ではなく、「ミシュパーツ」という字で、もともと「審き」という字。法的な言だ。エレミヤ記の5章4節に、

「⁴故に我いいけるは此輩は^{これら}惟^{ただ}いやしき愚^{おろか}なる者なればエホバの途^{みち}と其神の鞫^{さばき}を知らざるなり」（エレミヤ5・4）

この「エホバの途と其神の鞫」の「さばき」がそうなんです。預言者の言は対句になっている。即ち、正邪をはつきりとするのが「道」なんです。正邪善悪をはつきりするのとが道。そして正邪善悪をただ頭ではつきりするのではなくて、そこを本当に実存的に生きているのが道なんです。実践することが道。日本人は道の民。即ち、そういうことが身に付いているのが道。それが同時に法でもある。「法」という字は「三水に去る」と書く。水が低きに流れ去るのを法という。自然の姿。漢民族は偉いよ。

●聖霊のバプテスマ

そういつた意味における神さまの本当の道を示して、しかも、それはこわくない。

「²かれは叫ぶことなく声をあげることなく

不思議なことが書いてある。ガナリ立てるわけではない。

その声を街頭^{ちまた}にきこえしめず、

街頭演説するわけでもない。

³また傷める^{いた}蘆^{あし}をおることなくほのくらき燈火^{ともしび}をけすことなく

深い思いやりがある。

真理^{まこと}をもて道をしめさん。

「まいこと」「エメツ」、「アーメン」という字が使つてある。「アーメン」という字は、

「それが本当であるように」

という祈りの言葉。また、

「それが本当です」

といって祈る時に、「アーメン」と言う。その名詞が「エメツ」という。「誠^{まこと}」という字は、



「言が成る」と書く。言ったことが必ず成る。これが誠。ヘブライ語の「まこと」は正にこれなんです。ヘブライ人は、実現しないものは誠と思わない。観念的な「真理」ではない。具現するところの真理です。

「我は真理なり」

というのは神の言の具現者である、体現者であるということ。観念的に

「本当か、うそか」

ということではない。あるいは、「まこと」は「真事^{まこと}」とも書く。本当の事実となる。それを「まこと」という。事実的に道を示す、身証^{あかし}する。身証体現する。

だから、聖書というものは、これを読むんじゃない。これは捕まえられること、聞くこと、現すること。非常に身近なことなんです。魂で聞き、身体で現ずる。そういう世界が聖書の世界で、そういう角度にしなければ聖書は絶対に分らない。

では、いかにしてそれは可能であるか。一時的には可能のような顔をしているよ。パウロは初めはそれを出来ていると思った。ところが、それが大間違いであることが、ダマスコ途上で復活のキリストに霊撃されてわかった。わかったとは、聖霊のバプテスマにあずかったから。イザヤ書の「エホバの僕」は御霊^{みたま}を与えられてエホバの僕となったわけです。それが可能の根源なのです。

「⁴かれは衰えず喪膽^{きおち}せずして道を地にたておわらん。もろもろの島はその法言^{おしえ}をまちのぞむべし。」

「おしえ」というのは「トラー」「律法」。神さまの言、指図という意味。

選びの器、選ばれたる者は、このように神の僕にされるわけです。僕にならないで、「選ばれた」と言ったら、とんでもないはなしだ。傲慢になってしまふ。イスラエルの民は歴史的に本当にエホバの僕として自覚したらば、えらいことになったんだけれども、

「俺たちは選民だ」

と言って他を見下すようなパリサイになったから、それで散々やつつけられる。大事な福音が隠れているのに、この預言者の言を取り損なっているわけだ。だから、キリストをとうとう迫害し、その先鋒だったパウロもキリストに引っくり返されて、

「目から鱗の如きもの落ちたり」

というわけだ。イスラエル人は、パウロのあの鮮やかな事実を今も受けとらない。「頑^{かたく}な民」だね、「うなじこわき民」と旧約にある通り。

あなた方一人びとりが「選民」ですよ、「エホバの僕」とあなた方が成って下さい。あなた方がそういう選ばれた僕である。

「傷める蘆^{あし}をおることなくほのくらき燈火^{ともしび}をけすことなく」

本当のあわれみの心。

「惻隱^{そくいん}の心なきは人に非ざるなり」



と孟子が言っている。思いやりの心がなければ人間ではない。思いやりを「恕^{じよ}」という。孔子が言った。恕、一如の心。相手の心の如く成る。漢字のふくみは深いなあ。

神を自主としている人が本当の自主になる。神さまに絶対依存している僕となる時に――自分の心、意志がないところに絶対者の意志が入ってくる――本当の自主自由なんです。自分のいわゆる相対的な自由に死ぬ時に、絶対的な自主が来るんです。これが本当の自由なんです。天法が、天的法則が本当の自由。法則に乗っかって、本当に天衣無縫的な自由な行動をしたのがキリストとお釈迦さん。二大宗教だ、何といったって。

「私たち一人びとりがエホバの僕となれ」

ということ。選ばれたのは僕となることである。僕となったとき、本当に自由である。その内容は何かという、神の霊が来て、霊人となったから、本当の霊止^{ひと}となったから。

●汝はわが有なり

42章5節、

「⁵天をつくりてこれをのべ地とそのうえの産物^{なりいでもの}とをひらきそのうえの民に息をあたえその中をあゆむものに^{みたま}霊をあたえたもう。神エホバかく言い給う。」(イザヤ42・5)

「息」、「氣」はヘブライ語の「ネフェシユ」、「ソウル」(英)、「ゼーレ」(独)。「霊」はヘブライ語の「ルーアツハ」、「スピリット」(英)、「ガイスト」(独)。魂、氣に聖霊が来ないとこゝろに本当の元氣はない。エホバに全托する者は驚の如き者になる。43章1節、

「ヤコブよなんじを創造せるエホバいま如此^{かく}いい給う。イスラエルよ汝をつくれるもの今かく言い給う。おそるるなかれ我^{あがな}なんじを贖^{あがな}えり。我なんじの名をよべり汝はわが有^{もの}なり。」(イザヤ43・1)

これはもう完了ですよ。「お前を贖った」という。罪からの解放、患難からの解放。これが贖いという意味を持つ。患難と罪からの救い出し。だから、出エジプトも出バビロニヤも贖いなんです。身代金で買い取ったりすることも「あがない」です。ホセアもそのことをやった。そして、

「お前の名を呼んでいる」

と。神さまは皆さん一人びとりの名前を呼んでいる。

「汝はわが有^{もの}なり」

「私がお前の主格だぞ、お前は私の客体だぞ」

と。神さまのものになる。神さまの方は有で、こちらは無なんだ。

もうひとつ新約的な言でいえば、ヨハネ伝15章あたりの言でいえば、

「我汝を愛す」

ということ。キリストの言、



「父の私を愛する如く、私もお前たちを愛する」

という。「有^{もの}なり」ということの内容は「愛しているぞ」ということです。4節、

「⁴われ見てなんじを宝とし尊きものとして亦なんじを愛す。この故にわれ人をもてなんじにかえ民をなんじの命にかえん。」(イザヤ43・4)

「私の宝だ、私の尊いものだ、私は汝を愛している」

と。だけれども、選ばれたことには、使命がある。選ばれたのは、神さまの恵みを伝え、神さまの霊を伝える使命と責任を負わされている。それはまた光栄でもある。

イザヤ書19章24～25節、

「²⁴その日イスラエルはエジプトとアッスリヤとを共にし三つあいならび地のうえにて福祉^{さいわい}をうくる者となるべし。²⁵万軍のエホバこれを祝して言いたまわくわが民なるエジプトわが手の工^{わざ}なるアッスリヤわが産業なるイスラエルは福^{さいわ}いなるかな。」(イザヤ19・24～25)

驚くべきことが書いてある。これは終末的な言です。突き抜けています。選^えびのイスラエルはこのような平和の基となる。福祉^{さいわい}のもととなる。そのことはエレミヤ記4章2節にも出ている。

「²かつ汝は真実^{まこと}と正直^{なおき}と公義^{ただしき}とをもてエホバは活くと誓わんさらば万国の民は彼によりて福祉^{さいわい}をうけ彼によりて誇るべし」(エレミヤ4・2)

イスラエルは万国の福祉^{さいわい}のもととなる。聖書の「さいわい」という語は「ハピネス」という字でなく、「グレイス」(英)、「ゼーリツヒカイト」(独)という――「グリュック」「幸福」という字は使わない――恵福、祝福という宗教的な味の語です。この頃、日本で言っているような「幸福^{しあわせ}」という語ではない。この世間的幸福は浮雲の如くあてになりません。

「我なんじの名をよべり汝はわが有^{もの}なり。」

神さまに本当に贖いとられて神さまの有^{もの}になっっているから、何もこわいことはない。新約の光で読めば、キリストの贖罪を平伏して受け、キリストと一体一如の現実にあることを信受することになる。

パウロが言っているとおり、

「われキリストの中に、キリストわが中に」

という世界。「エン・クリスト」という信仰的現実であります。

●神は原因なり目的なり

44章1～3節、

「¹されどわが僕ヤコブよわが撰^{えら}みたるイスラエルよ今きけ²なんじを創造しなんじを胎内^{はらのうち}につくり又なんじを助くるエホバ如此^{かく}いたもうわがしもべヤコブよわが撰^{えら}みたるエシユルンよおそるるなかれ³われ渴けるものに水を



そそぎ^ひ乾たる地に流れをそそぎ^{みたま}わが靈をなんじの子輩にそそぎ^{めぐみ}わが恩恵を
なんじの裔^{すえ}にあたうべければなり」（イザヤ 44・1～3）

「水、靈、恩恵」という三つの字が同義語に使われている。即ち、聖靈は水に例えられていて、それは恩恵である。恵みということは、靈を与えられることが恵みなんです。

「⁶エホバ、イスラエルの王イスラエルをあがなうもの万軍のエホバ如此いい
たもうわれは始^{はじめ}なりわれは終^{おわり}なりわれの外^{ほか}に神あることなし」（イザヤ
44・6）

「我はアルファなり、オメガなり」

キリストがアルファでありオメガである、ということとは黙示録に出てくるが、あのよう
に始で終。原因であり、目的である。我々が救われたのも、選ばれたのも、贖われたのも、
その原因は神さまの側にあって、こつちにはない。目的も、神の栄光が現われるためであっ
て、その他の何ものでもない。

「始なり終なり」

ということとは、

「原因なり目的なり」

ということ。

「創造なり終末の完成なり」

ということですよ。41 章 8～9 節、

「⁸然どわが僕イスラエルよわが選めるヤコブわが友アブラハムの裔^{すえ}よ。⁹わ
れ地のはてより汝をたずさえきたり地のはしよりなんじを召しかくて汝にい
えり汝はわが僕われ汝をえらみて棄てざりきと。」（イザヤ 41・8～9）

「僕」という言と「選ぶ」という言がいつも出てくる。「選び」の内容は「僕である」とい
うこと、「僕となる」こと、「僕とする」ということ。僕の姿は何ですか。平伏しの姿、
「無者」

であることです。

「あなただけです！」

と言っているうちに「あなた」がこの無者の中に入ってくる。僕たる無者こそがキリスト
における自由人、無量人として主の御力が体現してゆくのです。

〔文庫編集者註…この講筵の文章は、著者が録音文字化原稿に編集の手を加えたものである
ため、字句の捕捉説明的な文章や、本筋に直接関わりのない多くの副次的な話は削除されて
いる〕

